

伝統技の習得に励む若者たち

——全国の話題のものづくり学校を訪ねて

●建設業界は次世代育成が危機

新潟短大の村尾欣一先生よりリレーを受けました。ここでは、建設現場の今後を支える若き技能者の育成に取り組む学校や若者たちの姿を紹介したいと思います。

近年、建設業界は、建設投資の激減、OJTの不全、熟練技能者の引退、若者入職の激減等で、現場の空洞化、品質保証の不安、技能継承の危機などが進行しています。

若者減の最大要因は、少子化や3K以上に、劣悪化する職人待遇にあり、今や職人年収は平均350万円前後と魅力のない産業になりつつあります。その解決は業界あげて取り組むべき課題ですが、このような困難下でも、各地では日々育成努力が重ねられています。

この業界は、訓練校等での組織的育成はほんの一部で、過半は各企業に入職後、OJTで育成されるのが実態です。企業では困難ななか、日夜努力が続けられていますが、ここでは学校における育成の様子を紹介します。

●全国に展開する多様なものづくり学校

この10年あまり、機会をみて各地の話題のものづくり学校を多数見聞し、関係者とも交流してきました。

1つは、筆者らが主宰する「建築系ひとづくりフォーラム」(実践研)という交流場、もう1つは、昨年度、調査研究仕事で、全国の多数の施設を訪問調査したことです。

現場人材を育成する学校の過半はいわゆる訓練校(機構立校、県立校、認定校)で、建築分野は膨大な数があり、また、認定校が圧倒的に多いのが特徴です。認定校は、現場で働きながら週1日程度通学、地域の組合立がほとんどです。

訓練校以外は少ないですが、バブル期前後から多様なスタイルの新たな学校が開設されています。1つは、話題の「ものづくり大学」(埼玉)で、独自カリキュラムによる試みが始まっています。専門学校でも、「日本建築専門学校」(静岡)、「職藝学院」(富山)、「日本工科専門学校」(兵庫)等では、実践的な実習が行われています。

高校でも一部、「熊本県立球磨工高」(伝統建築コース+伝統建築専攻科)、「都立墨田工高」(夜間、大工コース)等で実践的な木造コースが設けられ、「兵庫県立東播工高」(建築科)では、毎週建設現場に出る通年型の現場インターンシップが10年以上続けられています。

その他、既成の制度によらない例では、「金沢職人大学校」



▲職藝学院(建築職藝学科, 専門学校, 2年制, 富山県)



▲ものづくり大学(建設技能工芸学科, 私立大, 4年制, 埼玉県)



▲京都量技術専門学院(量科認定校, 週1日2年制, 京都市)



▲熊本県立球磨工高(建築・伝統建築コース3年+専攻科2年, 工業高校, 熊本県)

(中堅対象、市財団運営)、「森林たくみ塾」(家具職人育成、私塾、岐阜)、「大工育成塾」(国交省、工務店修業と集合講義を組み合わせ)などがあります。

●各地の若者育成現場を訪ねて

育成分野は、大きく木造系(制度を問わず全国に設置が最も多い)と非木造系(躯体、左官、木工、設備、土木など多種多彩な分野に広がる)に分かれます。

見聞できたのは膨大な数の一部ですが、40~50校にはなるだろうと思います。誌面上詳述できませんが、さまざまな学校を訪れ、技の習得に励む若者たちの姿や先生方の話、訓練ノウハウは大変参考になり、列島各地では頭が下がるくらいに育成努力が続いていることを実感しました。

しかし、近年はどこも生徒が減り、公共校は再編統合、認定校は休・廃校など存亡の危機が迫る状況です。

各地への旅は、直接現地で育成風景に接するとともに、土地のさまざまなものに触れることも楽しみの1つです。

皆さんも、機会あれば足を運んでみてはいかがでしょうか。遠い地ほど、きっと歓迎されることと思います。

製造業のひとづくり課題と同様、建設業でも影ながら育成努力が続けられていることをお伝えできれば幸いです。

次は、話題の「ものづくり大学」で実践的教育に取り組まれている三原齊先生にバトンをつなぎ、開校8年目の様子などを伝えていただきたいと思います。